
『真夏の怪 / 骨董屋変』

三上蓮音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『真夏の怪ノ骨董屋変』

【Nコード】

N1021B

【作者名】

三上蓮音

【あらすじ】

真夏の或る日、蘇芳はふらりと出掛けた先で骨董店に入る。しかし、欲しい品を探すことは叶わず、見つけたのは店主の死体だった――。口入れ屋「楸」シリーズ、第一作。

壱：熱夢の客人（まるごと）

陽炎立つ街は、黄昏に消え行こうとしていた。

灼熱に焦がれたアスファルトやビルたちが、籠った熱を放出しようとして躍起になっている。

しかし、淀んだ空気が覆いとなり、都会の熱は一向に天へと抜けない。

まるで花弁の如く幾重にも立ち昇る熱気のベールが、散ることを知らぬ花のように咲き乱れ、街を熱夢に染めるばかりであった。

夜ともなれば、乱反射する光は落ち着きを取り戻す。陽炎は消える。

だがそれも見せ掛けのまやかし。

陽炎の種は知らぬ間に人に宿り、熱を生み放ちながら貪欲に育ち、やがて再び大輪の花を咲かせる。

熱の迷宮は、人々の熱望とは裏腹に益々肥大していくばかり。

然して、イカロスの愚行は繰り返される。杞憂は何処かにて現実となる……。

いつ安息が訪れるのか知る者はいない。連日の猛暑と、それに続く熱帯夜だった。

* * *

暮れ行かんとする街を、一人の男が歩いていた。

飄々とした暢気な足取りで、時折立ち止まっては何やら四角い箱のようなものを目前に構えている。

正面にレンズがついていなければ、或いはそれがカメラだと気づく者もないであろう。ちゃちな造りの、玩具のような代物だった。それは正しく男が最近手に入れた玩具で、彼はこの数日試し撮り

がしたくて堪らないでいたのだ。

とうとう誘惑に負け、灼熱の太陽をもとめせず出掛けてきたのだが、もう陽も暮れようとしているのに暑さは少しも和らぐ気配がない。

憂き世離れしたこの男も、流石に後悔といった言葉を身に染みて感じていた。

男は、蘇芳^{すおう}という。

稀に見る美丈夫である。

しかし、中身ときたら実にいい加減に出来ている。

用がなければ出歩く者とていないこの暑い日に、わざわざ用事を拵えていそいそ出掛けるような酔狂人である。

手にしているのは、1960年代初頭にチェコ・スロバキアで作られた、ブローニーカメラの『CORINA^{コリーナ}』だ。

コンディションチェックを兼ね街に連れ出したはいが、当初の楽しみも、異常とも呼べる暑さによつて最早苦行と化しつつある。

元来、暑いのは苦手な質である。にも拘らず、蒸し風呂のような街をそぞろ歩いているのだから、それは当然の帰結と言える。

それでも、惹かれるものがあるといふシャツターを切ってしまうので、なかなか区切りというものがつけられない。

いつしか、谷中から言問通りを根津に向かい、上野公園に抜けようという散策コースの、その大半を歩いて来てしまっていた。

汗みずくになりながらも、暮れ行く陽光が織り成す妙景には魅力を禁じ得ず、足は前へ前へと進む。

傍目には、この暑さの中にあつて一人飄々として涼し気なようにも見えるのだが、次第に、池があつたら飛び込みたいという危険な衝動を抱くようになってきていた。

根津で切り上げメトロに乗るか、それともここまで来たならばいつそ意地でも上野公園まで抜けてしまおうか。そんなことを考えていた時である。

通りの向こうに、緑青の生じた銅板に縁取られ、正面に茶色いタ

イルを貼った小さな建物が目に入った。

その平坦なファサードは、一見すると洋風建築のようである。

「ああ、この辺はまだ残ってるのか……」

前面が硝子戸となった一階は、焦茶色の建具と緑青色の壁面とのコントラストがなんとも渋い風情を湛え、上に目を転じると、二階から貼り出されたタイルがレトロモダンといった雰囲気醸し出し
ている。

これは所謂、昭和初期に多く建てられた所謂看板建築というもので、ならば三階建てに見える一番上の部分はマンサール屋根と呼ばれる物のはずだった。

「全然屋根に見えないんだけど……。普通に三階建てにしか見えないのは、見方が悪いからなのかなあ？」

聞き齧りなのであまり正確なところも分からず、後で専門家に聞いてみようと、取り敢えずアングルを変えて何度かシャッターを切っておく。

通りを渡って近づいてみると、そこはどうかやら骨董店のようだった。

入り口には、『琥珀』とだけ彫られた小さな木の看板が掲げられている。

磨り硝子のせいかあまりよく中が見えないのだが、茶器なども扱っているようである。

蘇芳の雑多な趣味の中には陶磁器の蒐集というのもあるのだが、今は訳あって知人のために探している品があった。

自分の物は兎も角、念のためそれだけは有無を確かめずにいられないと、蘇芳は誘われるように引き戸に手を掛けた。

鉄の呼び鈴が、音高くチリリンと鳴る。

思えば、暑さのあまり判断力が低下していたのだ。

建物に一步足を踏み入れた途端、空気がひんやりと冷たくなった。すっかり外気にのぼせていた蘇芳は、「やっぱり冷房はいいなあ」

と、シャツの胸元を手でパタパタさせながら店内を見て回る。

店の外観もレトロモダンといった雰囲気だったが、商いの内容も和洋折衷である。良い具合に古き良き時代を留める品々が渾然と融合し、全体として何ともいえぬ趣を作り出していた。

時代がかった家具や陶磁器、銀器、洋燈に置き時計。その他にも、装身具などの細々とした物が所狭しと並べられている。

蘇芳の好みは、和物なら染め付け、洋物ならブルー＆ホワイト。それに中国茶器が加わる。

色々と手を出した挙げ句、今は割と分かりやすいところに落ち着いているのだが、中でも蕎麦猪口やティーボウルといった小さなカップに凝っているのだから、分かりやすいにも程がある。

状態の良さそうな蕎麦猪口が幾つも並んでいたが、目下探しているのは、オールドノリタケのカップ＆ソーサーだった。

ナーサリー（子ども用）で、他にティーポットとシュガーポット、ミルクジャグがセットになっているのだが、揃いのうち一客を破損してしまったのだという。

祖母だか曾祖母だかの代から受け継がれてきた物らしく、幼少期に親しんだ品ならば思い入れもひとしお深いのだろう。

叶うものなら、自分の手で探し出したいと思う。

彼の人の面影が脳裏に浮かび、蘇芳は思わず笑みを浮かべた。すぐにハッとして、ニヤけた口元を引き締め周囲を見渡すが、蘇芳の他に人のいる気配はまるでない。

狭い店内である。他に客がいないのは入ってすぐに分かった。蘇芳のいる場所は十坪に満たない土間で、商売柄か、足元は板敷きに替えられている。

壁面には天井近くまで家具や棚などがバランスよく配置され、その中や、段差で棚となった場所にも器や小物が整然と並べられている。

中央には人が通れるだけのスペースを空けて机が置かれ、その上もディスプレイに利用されている。

狭いながらも工夫され、品数が多い割に見苦しさは感じられない。土間の向こうには上がり框に座敷が設えてあり、畳敷きのその場所にもやはり壁面に家具や骨董が並んでいたが、衝立てと机で帳場が区切られている。

暖簾の掛かった座敷の奥は、居住スペースとなっているのだろう。看板建築は、一見すると洋風建築なのだが、それは正しく表面だけで、建物自体は木造であり伝統的な商家の造りである。

店の奥には居間や台所といった生活空間が続き、二階以上は完全に私的な場所となるのが常であった。

呼び鈴が鳴ったので、じきに店主なり店番なりが姿を現すと思っていたのだが、思えば一向にその気配がない。

ただシンと静まり返っているばかりで、表の喧噪やら何やらといったものも聞こえてこない。

時刻はといえば、ちょうど夕方の買い物時である。

通りに面していて、しかも簡単な引き戸を入り口としているにも関わらず、この静けさは異常である。

我知らず暑さで朦朧としていた蘇芳の頭に、漸く理性の二文字が甦ってくる、肌に纏わりつく冷気が突如として異質なものに変じて認識された。

ザワリ、と厭な感じが背筋を撫で上げる。

鈍いにも程があったが、明らかに悪寒である。

どうやら、知らぬ間に何かの境界を越えてしまったらしい。

これはもしかして失敗したかなと蘇芳がのんびり思ったその時、不意に女が現れた。

「……何か、御用でしょうか」

黒い紗の着物をさらりと着こなした、品のいい女性である。

顎のラインで切り揃えられた髪は今どき珍しい漆黒で、揺れるとサラサラ音がしそうなほど艶やかだった。

だが、薄く化粧した顔は蒼褪め、どこにも生氣らしいものがみつけない。

端正なだけに、まるで良く出来た人形を前にしているかのようだった。

「ええ、ノリタケのティーカップを探しているのですが……。失礼ですが、こちらのご店主ですか？」

微笑を浮かべて蘇芳が問う。

たえ何があるうとも、こればかりは習性である。

相手が女性ならば尚のこと、他人に笑顔で接するのが蘇芳という男だった。

大概是、無邪気な笑みにつられて無意識に笑い返すか、その美貌に気づき頬を染めるといった反応をみせる。老若男女の別なく、それが常であった。

だが、女は悲しげな様子で首を横に振るばかりである。

「……いいえ」

その時不意に、女の着物から何ともゆかしげな香の匂いがする。ことに蘇芳は気づいた。

どこかで嗅いだ香りだと思う。

だが、記憶を辿る間もなく思考は遮られる。

女は上体を捻って蘇芳から顔を外すと、右手をスツと上に動かした。

黒い着物を身に纏っているせいか、白い手はポウツと光を放ち、それだけ宙に浮かんでいるように見えた。

そして座敷の奥を指差すと、女は静かに言った。

「この屋の主人はあちらで……、亡くなっております」

袂から、微かにチリンと鈴の音が聞こえた。

式：口入れ屋「楸」

東京神田。

楸結己は、この街に事務所兼住居を構えていた。

老朽化した社屋をS O H O 向けに用途転換したビルで、昭和の面影を残す建物には独特の雰囲気が漂っている。修復の際に設備などは全て新しく取り替えられ、外装内装共に手を加えられてはいるが、建物の持つ魅力を損なわない気遣いが随所にみられた。

以前は、その古さから幽霊が出るなどの噂が立ち、近隣からも解体を望む声があったのだが、今では入居待ちリストが出来るほどの人気物件へと変身を遂げた。

夜、淡い色合いの街灯に浮かび上がる姿は、やや厳めしく、そしてどこか誇らし気に見えた。

入り口のステップを軽やかに上がり、装飾の施されたドアを開けて、蘇芳は口入れ屋「楸」を訪れた。

目当ては五階にある。

塔屋に設けられたエレベーターは避け、専ら建物中央にある螺旋階段を利用している。

エントランスと螺旋階段の美しさを、蘇芳は気に入っていた。

「なんだ、冷房が入ってる」

ドアを開けるなり、蘇芳はそう言った。

「どういう心境の変化なんだか……。これなら真直ぐこつちに来るんだった」

結己は冷房嫌いで、よっぽど暑い日でもその便利な道具を使いたがらないのだが、この様子ではどうやら主義を変えることにしたか、変えざるを得ない出来事でもあったようだ。

「快適にしておくかと長居するでしょう」

蘇芳の呟きに、結己はそう返した。

長居するのが相談に訪れた客なのか蘇芳なのかは、言わずもがなである。

調べ物をしていたのか、デスクの上にはファイルが数冊、置かれたままになっている。

楸結己は、目立たない容姿の青年だ。

スーツにネクタイ、そして眼鏡。個性と呼べるのはそれで終わりである。顔形や髪型、体型、どれをとってもあまりにありふれていて、人の印象に残りにくい。

だが、外見で個性を競う現代にあつて、結己は敢えて周囲に埋没することを選んでる節があつた。

「はい」

蘇芳は無造作に紙袋を差し出すと、来客用ソファに腰を降ろした。

「なんですか、これは」

仕方ないといった体で受け取りながら、結己が訊ねる。

「なにつて……」

「まさか、ただの土産とは言わないでしょう？ 今度は一体どんな厄介事を持ち込むつもりですか？」

「相変わらず、結己は勘が鋭いねえ」

蘇芳は人好きのする笑顔を満面に湛え、悪怯れもせず言い放つ。

「本当は結己の好きな練切にしようと思っただけど、あんまり暑くて発売中止なんだつて。だから干菓子ね」

誰もそんなことを聞いているのではないのだが、この男には言つても無駄というものである。

結己も慣れたもので、ため息をひとつ吐いただけで追求はしない。マイペースな男は、「ところで、ちっちゃいのはどこ？」と周囲を見渡している。

ちっちゃいの、とは結己が飼っているコザクラインコのこと、明るい若草色の体に朱色の顔をした小鳥である。

アフリカ原産の輸入種なのだが、色変わりが多く、飼う者の目を

楽しませる。結己が飼っているのはスタンダードカラーで、和をイメージさせることから「和菓子」や「練切」「ちっちゃいの」「小鳥」など、適当な呼ばれ方をしていた。まだ正式に命名されていないのだ。

「もう寝てますよ」

結己の視線の先を追って見ると、布の掛かった塊のぶら下がるポールがある。

勿論その塊は鳥籠で、夜になったので、布を掛けて小鳥を休ませているのだった。

「なんだ、つまんないの」

蘇芳がそう言うと、自分が話題に上っていると知ってか、はたま突然賑やかになったことを驚いてか、小鳥は「ピチュ」と一声鳴いた。

「ちっちゃいのは相変わらず元気そうだね」

珈琲を淹れて戻った結己は、その言葉に眉を顰めた。

「それが……。このところの暑さで参ってみたいで、試しにとクーラーを入れたら、やっと食欲が戻ったんですよ」

「じゃあ、冷房はそれで？」

「そうですよ」と答え、結己はため息を漏らす。不本意だが仕方ない、といったところか。

この小鳥は、恋人に押し付けられ、嫌々飼うことになったという経緯がある。

だが、今やすっかり溺愛している事は蘇芳も知っていた。

「ふうん？　ということとは、ちっちゃいの様々だねえ……」

そう呟きながら、これからは「小鳥様」と呼ばなくちゃいけないな、など考える。

「ところで、そろそろ本題に入っただけませんか？」

蘇芳の前に珈琲を置き、結己はそう言った。

「……それで、慌てて奥に行ってみたら、本当にあったわけ。死体が」

蘇芳は暢気に言うと、自分が買って来た干菓子を摘んで口に放り込んだ。

まるで「そこに椅子があった」とでもいうような口振りである。

「初老の男性でね、完全に死んでるのは見て分かったけど、振り返ったら女の人は消えてるし……」

「それで？」

結己は蘇芳の向いに座り、話を聞いている。

時折、目に見えない何かを捉えるように視線を彷徨わせるのが、奇妙といえば奇妙である。

「仕方ないから、隣の家に駆け込んで救急車呼んでもらったよ」

「そう……」

「そこにいてくれて言うから、お隣のおばちゃんと話しながら待つてただけ。警察も一緒に来て、事情聴取されちゃったよ」

その言葉に、結己は少しばかり眉根を寄せた。

「女の人のことは話したんですか？」

「話したよ。そしたら何か胡散臭がられちゃって、『署までご同行を』とか言い出すから、用事があるって言ってバックレて来ました」

語尾にハートが付きそうな口調である。

結己は額に手をやる。まったく頭が痛い、と思う。

蘇芳のほうで結己より年上なのだが、まるで大人気ない。

その上、自分の言動が多少ならずとも周囲を混乱させるという自覚にも欠けている。

それが原因で無駄にトラブルを引き起こしているのだが、本人はあまり気にしていないようである。

「救急車を呼ぶ機転が働いていながら、どうしてそんなバカな発言が出来るんですか？」

これは質問ではなく、愚痴のようなものだった。

本人は一向気にせずトラブルの種を撒き散らしているが、それを刈り取るのはいつも結己なのだから無理もない。

だが、その事に関しては蘇芳も思うところがあるらしい。

「そうなんだけどさ。救急車とか来るの遅くて、つい手持ち無沙汰におばちゃんと話し込んでちゃってさ……」

長話が高じて、言わなくていい事まで話してしまったらしい。

店主が店で倒れていたならばまだしも、奥向きでならば、何故そんな所に入って行ったのかと尋ねられるのは筋である。

『欲しい物があつて、声を掛けたが返事がない。それでちょっと覗いてみた』という話が、途中から『実は、着物の女性が、店の主人が奥で亡くなってるって言つから……』などと変化したら、それは誰も不審に思うだろう。

しかも、その女性はいなくなってしまったのである。

近所の者に聞いても、誰もそんな女は知らないという。

『琥珀』の店主は独身で、自分は天涯孤独なのだと言っていたらしい。

そして、それ以外の事は何も話したがらなかった。

『戦争や震災がありましたからね。何か、辛い事でもあったのだろ……』と、誰も、何も聞けなくてねえ……』とは、隣家の女性の言葉である。

だから、訳知り顔の女の存在など、初めからどこにもないはずなのであった。

仮に、その女が客や通りすがりの者だったとしても、何か不自然であるし、妙である。

嘘をついていると思われるでも仕方のない状況を、蘇芳は自ら作り上げてしまったことになる。

「それで、第一発見者から不審者に格上げされては世話がないですね」

「面目ない」

蘇芳は、肩を竦めてみせた。

「僕を身元引き受け人に指定したんですね」

これも質問ではない。

「うん。だって、そういう契約でしょ」

おかげさまで助かりました、と蘇芳は笑みを向けた。

対する結己は、苦虫を噛み潰したような顔になる。

どうしてそんな契約を結んでしまったのか、後悔というものは先に立たずである。

結己に蘇芳を引き合わせた者の老獪な顔が目に見え、恨みがましい気持ちが沸き起こる。

だが、彼の人は、結己に荷物を背負わせることを楽しんでいるので、恨んだところで逆に面白がらせるだけである。

まったく遣り切れない、と結己は思う。

「おかげで、こちらは仕事が増えましたよ」

結己は、今日何度目かのため息を吐いた。

楸結己は口入れ屋である。

人に人を紹介し、何か困った事が起これば相談に乗る、問題を処理する。そういったことを請け負っている。

だが、現代にそんな名の職業はない。

コーディネーターやコンサルタント

強いて言えば、まとめ役や相談役といったところなのだが、やっていることは村の肝煎である。コーディネーターやコンサルタントを名乗るのも烏滸がましく思い、かといって肝煎というのも何だかおかしい。では、口入れ屋というのはどうだろうということになった。

口を利くのだから丁度いい。どうせ通り名のようなものだから。

そんな理由で、口入れ屋を名乗ることと相成った。

蘇芳とは、この仕事を始めた頃からの付き合いである。

なにせ記念すべき依頼人第一号であるのだから、浅からぬ縁である。

「現実的な話からしましょうか」

結己はそう切り出した。

「まず、所轄の担当者から連絡が来ました。蘇芳の照会は済んでいます。それと、『琥珀』の弁護士を存じ上げておりましたので、あちらに紹介しました」

「それはまた、都合のいい話だね」

二人は、思わせぶりに視線を交わした。

「ええ……。『琥珀』の店主である朝凪氏とは、あさなぎ 巳結みゆうの紹介で知り合ったのですが、弁護士が必要とのことでしたので、僕が紹介したんです」

巳結とは、結己の叔母である。年が近いせいもあって仲が良い。

「弁護士は一宮いちみやというのですが、彼とも連絡を取り、何か分かったらこちらにも連絡が来るよう手配してあります」

蘇芳は、デスクに置かれたファイルに目を遣った。

彼が来る前に、一通りの仕事は済んでいたようである。

「それで、他には？」

蘇芳が先を促す。

その顔は、どこか楽し気ですらあった。

結己は、厭そうに顔を顰める。

「一宮の話では、朝凪氏は体調を崩し、身辺整理に取り掛かっていたという話です。それで弁護士が必要だったんですね。警察の話も併せると、やはり老衰、もしくは病死といったところだと推測されますが……」

「たぶんそうだと思うよ。あれは事件性はないね」

妙な確信でもって蘇芳は言う。

「おそらくは。でなければ、蘇芳は今ごろ容疑者として身柄を拘束されているでしょうからね」

「それで？」

二人とも、『琥珀』の店主、朝凪の死に関しては自然死を疑っていない。

仮に事件性があり、他殺だとしたら、それは口入れ屋が関わる問題ではない。警察の領分である。

「やはり、その女性の存在が気になりますね……」
結己は呟いた。

「何か分かったの？」

「この件には、巳結が関わっているようなのですが、まだ彼女とは連絡が取れていないんです」

「みゅーちゃんどうかしたの？」

蘇芳は、巳結のことをそう呼んでは嫌がられているのだが、どうにも懲りない様子である。

結己が幼い頃、舌足らずに呼んだのが始まりなので、彼としては苦笑するよりほかない。

「いえ、工房に籠っているのでしょう。数日前にそんなことを言っていましたから」

「手が離せないってことは、いちまさんか。……あれ？ そういえば、あのお香はみゅーちゃんとこのかな？」

巳結は、個人的に市松人形の修復などを行っていて、時々工房に籠り切りになってしまう。

また、人形の衣装製作を生業としているのだが、着物には匂い袋を付けて渡すのが常である。

蘇芳は、着物の女性から薰っていた香の匂いを思い出していた。

「そうですね。蘇芳からその匂いがするのは確かなんですが……」
結己は、曖昧に言葉尻を濁す。

彼には特異な能力があり、それは「匂い」に特化している。

普段は厄介なだけの力だが、時には問題解決の糸口となることもある。

「それが何を意味するのかまでは、まだ判断しかねます。巳結絡みの品が、何か店にあるのかもしれませんが」

「そうだねえ……」

「明日にでも巳結と会ってきます。一宮とも連絡を取りますから、

くれぐれも蘇芳は勝手に動かないで下さいね」

もう一度『琥珀』を覗いてこようかな、などという蘇芳の目論みは、呆気無く看破され、駄目を押された。

このままだ様子をみていればいい他人事に、わざわざ首を突っ込む羽目に陥るのは、偏に蘇芳の好奇心を満たすためだけである。

放っておくと何をしでかすか分からない蘇芳を抑え込むには、それしか手がない。ということ、結己は嫌というほど学んだ。

因果である。

干菓子をお茶請けに珈琲を味わいながら、結己は報われる日が来ないのを薄らと知っているような気がした。

珈琲は、すっかり冷めてしまっていた。

参：夏の終わり

数日後。

その日は、朝から雨が降っていた。

雨の雫のひとつぶひとつぶが、熱を宥めるように慰めるように触れては落ち、触れては落ちして、地へと辿り着く。

天の恵みに洗われて、世界は人知れず静かに浄められて行く。

再び空に還るその時まで、水は万物の恵みとなり、また、過ぎれば嘆きともなる。

狂い始めた歯車は、まだ辛うじて外れてはいない……。

永遠の回帰によって鎮められた空気は、漸く人心地がつくほどとなった。

ささくれ立った人の心にも、雨は潤いを与えるようであった。

* * *

聖堂の中に一歩足を踏み入れると、雨音は遠く聞こえなくなった。荘厳なミサ曲がパイプオルガンによって奏でられ、聖歌隊の少年たちが天使の声で歌っている。

身廊の中央通路を進むと、信者席を挟んで両脇に列柱が連なり、頭上はアーチ状のヴォールト天井になっているのが分かる。

ロマネスク様式だろうか。立派な建物だった。

通路の先にある、内陣サンクチュアリと呼ばれる場所には、ステンドグラスを背に主祭壇が見える。天使らしき像が二体、十字架像に向かって跪いていた。

内陣の手前両脇には、柱を背に側祭壇が設えてあり、向かって左手にイエス像、右手には幼子イエスを連れたマリア像が置かれ、少し高い位置から人々を見下ろしていた。

十字架像の両横には、背の高い燭台が三本ずつ、合わせて六つの蠟燭が灯されており、天使像もまた七枝の大燭台を手にしている。主祭壇に近い位置にある赤い灯火は、聖体ランプであり、聖櫃内に聖体が納められていることを示す常明燈である。

何なのかは分からないが、「聖体」と呼ばれる某かの物がそこにはあるのだろう。

香が焚かれ、周囲には馥郁とした薫りが漂っていた。

生憎の天気ではあったが、側廊の壁面にあるステンドグラスの窓からも、鈍いながら柔らかな光が射し込んでいる。

だが、それだけでは光量が足りないのか、効果的に照明も灯されていた。

信者がベテルと呼び神の家と言う、この空間は、まるで外界から切り取られたかのように存在していると、蘇芳は思う。

単に、馴染みがないからかもしれない。

救われぬことを知っている身としては、聖域と呼ばれる場所は、悉く居心地が悪かった。

参列者の姿は疎らである。

だが、思っていたほど寂しくもなかった。

そこかしこに光の粒が、きらきらと漂っている。

入り口に近い、やや後部の信者席に、結己はいた。地味なスーツ姿は、普段と何ら変わるところがない。

「ちょうど始まったばかりですよ」

足音を立てていないというのに、結己は振り向きもせず、蘇芳の気配を察して声を掛けてきた。

顔は正面を向いたままだ。

蘇芳は薄く微笑んで、結己の隣へ並び立つ。

「涼しくなったからね……」

我知らず、言い訳のような言葉を口にする。

気温など何も関係ないことは、二人とも承知していた。蘇芳は、

こういった場が苦手なのだ。

「通夜もここだっけ？」

確か、電話でそう言っていた。

上の空で聞いていたが、覚えてはいる。だから場所も間違えずに
来れたのだ。

「ええ。ご家族もいらつしやいませんか……。でも、遺言してく
れていて良かったですよ。そうでなければ、お寺で葬儀をするこ
ろでした」

「カトリックとはねえ。ちょっと意外だったかも？」

日本では、宗教の自由は法律によって守られている。

原則として、人がどんな宗教を信奉しようとか構いはしないし、
それは尊重されて然るべきものである。

だが、「なんとなく仏教」という意識が人々の中に存在している
のも、また事実であろう。

お宮参りや七五三は神社、結婚式は教会、そして葬式は寺。日本
人ほど、状況に応じて宗教を使い分ける民族もない。

「そうですね……。ご近所の方も、誰も、朝凧あさなぎさんがクリスチャ
ンだとは知らなかったのですよ」

聖歌が終わり、列席者は皆着席する。

司祭による聖書の朗読と、祈祷とが続けられる。高く朗々とした
声が聖堂内に響き渡った。

主祭壇の前には、花で飾られた棺がある。

そこに横たわっているのは、朝凧という老人だ。

生の喜びも苦しみも終わりを告げ、帰天するのだという。

父なる神の座す場所。天国。

彼は、そこへ行くことを選んだのだ。

「あの花は、巳結みゆうが詠えたんですよ」

棺に目を投じたままの蘇芳に、結己がそう言った。
言われて初めて、目が離せない理由に思い至る。

違和感だ。

花束は、白を基調としているが、差し色に使われているのはピンクである。

その色の持つ穏やかさ、華やかさは、寧ろ、結婚式に用意した花だと言われたほうが、余程すんなり受け入れられる気がした。

「みゆーちゃんが？」

彼女のしたことならば、何か意味があるのだろう。そう蘇芳は思った。

「ええ。通夜の祈りにも出席していました」

「そうなの？」

珍しいこともあるものだ。

巳結は、人との関わりを避けて暮らしている。

「朝風老とは懇意にしていたらしくて……。色々と助かりました」

「そう……」

ならば、彼女の眼鏡に合う人物だったということか。巳結は元来、人嫌いではない。

「アンティークを探していて、『琥珀』を訪れたのだそうです。

それで、話をするうちに巳結が人形の衣装を作っていることを知って、朝風老から仕事を頼まれ……。何着か、古い着物を人形用に仕立て直したと言っていました」

「それってもしかして、いちまんさん？」

「……だそうです。売り物ではなくて、個人的な品だったそうです」

「そう……」

市松人形は、基本的に「子ども」である。

子どもの遊び相手であると同時に、子どもそのものでもある。

そして、人形というものは、人の姿に似せた形代かたしろである。我が子の災厄を代わって引き受ける、「器」たり得るものだ。

商品としてではなく、私的に大切にしていたならば、何か謂れのある品なのだろう。

巳結は、そこに何かを見出だしたのだろうか。

「一宮は、優秀な弁護士ではありませんが、やはりこういうことは女性のほうが、スムーズに事を運ぶ術というものを心得ていますからね」

結己は、言葉を選んで話していた。

他人の耳もある。聞かれたくない事もある。

ならば黙っていればいいものだが、蘇芳に気遣っているのだろう。話が聞けないならば、こんなところにいる意味はない。言外に、そう匂わせてしまっているのかもしれない。

「男が何人集まっても、女性一人に適わないことがあるからねえ」
蘇芳も、話を合わせる。

本当に……。女性とは偉大だと蘇芳は思う。

男とはまた違った情を持ち、幼き少女であっても聖母の如き慈愛を示すことがある。

それに、巳結は楸一族なのだ。

結己が現れるまで、一族の当主候補だったこともある。鎮魂の技には長けている。

「そうですね……。町内会でも、弁護士の一宮より、巳結の存在のほうを有り難がっていた節がありますよ」

一宮が愚痴っていたのを思い出し、結己は苦笑する。

身寄りのない朝凧である。葬儀は老人会か町内会で執り行うか、また、無縁仏として葬らねばならないのかと、近所の人々がやきもきしていたところに弁護士が現れ、全て取り計らってくれたことに感謝していた。

だが、細かい気配りというものはやはり至らないようである。

「朝凧老について、皆さん心配されていましたからね。こうして葬儀を執り行うことが出来て良かったと言っていましたよ」

「万事解決？」

「そうですね……。大体は。古物は同業者が引き取ることになっていますし、私物の大部分は教会に寄付されます。幾つか、巳結に

贈与される品があるようですし、僕は不動産の処理を一任されています」

結己は近代建築保存会のメンバーであり、朝凧も、会員に名を列ねることこそなかったが、会の活動内容などは結己を通じて知っていた。

だからといって、赤の他人にそんな大役を一任するとは思いがけず、結己も驚いている。

最善を尽くしたいとは思っているが、いつも理想通りに行えるとは限らない。それを知っているだけに、些か重荷でもあった。

「警察のほうは？」

「やはり、事件性はないとの見解です。監察医務院による行政解剖の結果では、朝凧老……朝凧氏は、熱中症による多臓器不全で亡くなったということです。ここ数日の暑さで、食欲も落ちていたのでしょうか。水分は摂っていたようなのですが……」

「確か、体調に不安があったんだよね？ 弱っていたところに、

この猛暑か。老人には厳しい環境だよな」

「そうですね。熱中症の怖いところは、感覚が麻痺するのが先なので、気がついた時には倒れていたり手遅れだったりするところです。暑さで、しかも屋内で死ぬなんて、昔はなかったのかもしれないせんしね……」

年々、東京の亜熱帯化は深刻になり、熱中症による死者も増えている。

そして、高齢者の死亡数が圧倒的に多い。

若年層では、屋外作業やスポーツなどによる労作性の熱中症が多いが、高齢者に多いのは、熱波による古典的熱中症と呼ばれるものだ。

これは、屋内でただじつとしていても起こりうる。

高温となった室内にいて、知らぬ間に体温が上昇する。しかも汗はかかない。汗をかかないということは、体に籠った熱が外に出ていかないで蓄積されてしまうということだが、それに気づかない。

寧ろ、熱中症に陥った者は寒気を感じていたりする。

「……ちよつと待って。あそこには冷房があつたでしょう？ 結己だつて使つてたくらいなのに」

「そのことなんですが……」

起立を促され、言葉が途切れる。

光が降るようなオルガンの音色で聖歌が奏でられ、聖歌隊のリードに合わせ、列席者が辿々しく歌う。

蘇芳は、黙つて聞いていた。

結己は葬儀ミサの槩を手に、眉間に微か皺を寄せている。どうやら歌は苦手らしい。

唇を動かしてはいるが、音は聞こえない。

困つた様子である。

蘇芳はそれを微笑ましく思う。神を讃える言葉を持つことは、幸いである。

この子らには幸せになつて貰いたいと……、いつも、切に願っている。

長い尾を引いてオルガンが止み、また着席する。

「あの家に、クーラーなど無かつたのですよ」

ぼつりと結己が呟く。

騒めきの残る蘇芳の耳に、その言葉は奇異に響いた。

「一台もね」

* * *

喪主の挨拶と献花を以つて、葬儀ミサは恙無く終了した。

勿論、遺族などいない。弁護士の一宮が代表として、列席者に短く謝辞を述べるに留まつた。

一宮は背の高い若い男で、弁護士でなければ代議士か政府の要人か、というような威圧感を全身に滲ませているのだが、結己によれば、どうも見掛け倒らしい。

一見すると堅苦しく融通が利かないようだが、口を開けば、物腰が柔らかく、驚くほど人が善いのだそうである。

外見と内面のギャップが面白いのだと、可哀想な言われ様をしていた。

献花は、棺の上に薔薇の花片を散らすものだった。

これも已結の発案なのである。美しさと儚さ、悲しさといったものが相俟って、その後、長く心に残る事となった。

棺を見送り、朝凧に別れを告げた。火葬場へは二人とも遠慮する。結己に気づき、棺に寄り添った一宮が軽く会釈して見せた。

棺の上から零れ落ちる花片が、幻想的であった。

一宮たちの後ろを、小さな子どもがついて行くのが蘇芳には見え
た。

その姿は人形のようにであった。

教会の外に出ると、まだ少し雨が降っていた。

穏やかな雨だと蘇芳は思う。

何時の間にか、薄日も差している。

狐の嫁入りとは、少し違うだろうか。ただ、晴れてきたということ
とだろうか。

葬儀だというのに、不思議な穏やかさを感じていた。

年若い者の早世は悲痛だが、老年にもなれば、死は安らぎである
かもしれない。

だからだろうか。

蘇芳にとって、死とはただ過ぎ行くものだ。

命が手から零れ落ちる。いつも、その虚しさばかりが心に残る…

…。

朝凧とは、生きて会う事はなかった。そのせいで、何の感慨も湧
かないのだろうか。

結己によると、あの建物のどこにも、冷房設備は無かったそうで
ある。

涼を得る機器といえば扇風機だけであり、部屋を冷やすほどの能

力には欠ける。

だが、蘇芳も感じた通り、扇風機だけでは説明がつかぬほど、確かに建物内は冷えていたようだ。

その点では、検屍にも疑問が生じたようである。

筋肉の硬直や死斑などの状態から得られる情報と、腐敗の進行度には、明らかな齟齬がある。然し乍ら、人為的な細工などの証拠はどこにも発見されなかった。

近年、科学技術の発達は著しい。科学捜査で解明出来ないことはないように思える。

だがしかし、目に見えるものばかりが全てではない。数字や情報^{データ}だけでは推し量れない物事も、確かにこの世には存在する。

ひとそれぞれ、目に見えるものも違う。

得てして、都合の悪いものは見えなかったこととして人の脳は処理する。その、「都合の悪い」ものの幅は、それぞれに違う。

蘇芳は、それをよく知っている。

教会の中で、二枚の写真を見せられた。

一枚は、和服を着た、清楚で凛とした若い女性。髪は結い上げている。

もう一枚は、市松人形だった。市松にしては、やや髪が短い。

どちらも同じ紗の着物を着て、どこか面ざしが似通っているようにも見える。小首を傾げている様子も同じだった。

それを見て、蘇芳は漸く合点がいった。

自分が遭ったのは、この女性であり、人形であつたに違いないと。幼子を生き写した人形は、彼女の望みを叶えるために器となつて働いたのであろう。

同じ場所で生きられなかった者たちが、せめて死しては添い遂げようと、蘇芳や結己を利用したのだ。

鍵となるのはやはり巳結である。

巳結は彼らのロマンスを知っているのだらう。蘇芳はそう確信した。

言葉を持たぬ手向けの花が、しかし雄弁に物語っていた。

「そういえば、巳結に叱られてしまいましたよ」

傘立てから傘を取りながら、結己が言う。

「おや、珍しい。何をしたのさ？」

「……してないからです。いつまで小鳥に名付けないでいるつもりか、と」

「そうだねえ」

何やら躊躇いがあるらしく、ずっと適当に呼んでいた。まあ、良い事ではないだろう。

「ええ、名のないままにしておくのは良くないと言われました」

「それで、決まったの？」

「……ええ。もうずっと、それしかないと思っていましたから。」

『朱雀』はどうだろうか」と

「ふうん？」

朱に雀と書いて『朱雀』。

あの小鳥は顔が赤いし、南方が原産だという。朱雀は四神のひとつで、南を守護するものだ。

言われてみれば、似合うような気もする。

「いいんじゃないの？」

丈夫に、元気に育ちそうな名だ。

「ええ……」

ハザードランプを点滅させ、タクシーが教会の門前に停車する。

結己が呼んだ車だ。

小雨に濡れるのを頓着しない蘇芳に、後ろから、結己が傘を差し向けて続く。

横に並ぶと、蘇芳のほうが少しだけ背が高い。

二人してタクシーに乗り込み、結己が運転手に行き先を告げる。

結己の部屋で、彼の恋人の沙那さなが、浄めの塩を用意して待っているのだという。

それもまた可笑しい話ではあるが、面白いのでついて行こうと思

う蘇芳であつた。

久し振りに沙那の顔も見たい。

彼女は聡く、可愛い子だ。蘇芳のお気に入りでもある。

無愛想な運転手は、無言で頷いて見せた。

発車する寸前に、何かが蘇芳の目の端に留まつた。

人のようである。

振り返って見ると、相合い傘をした二人連れであつた。

今どき珍しい和装姿で寄り添う男女は、骨董屋の主人と写真の女

性に、どこか似てはいないか……。

こちらに会釈したようである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1021b/>

『真夏の怪 / 骨董屋変』

2010年11月25日02時25分発行